

平成29年度
大規模肉用牛経営動向に関する調査報告書
【要約版】

【要約版】

1 平成 28 年度の経営概況

(1) 飼養頭数

■平成 28 年度の肥育牛飼養頭数規模別の経営体数の分布は、「200～300 頭未満」12.6%、「300～500 頭未満」13.6%、「500～1,000 頭未満」19.5%、「1,000～1,500 頭未満」7.0%、「1,500～2,000 頭未満」6.0%、「2,000～3,000 頭未満」5.3%、「3,000 頭以上」7.0%であった。

■品種別肥育牛飼養頭数規模別経営体の割合は、黒毛和種が「200 頭以上」で 51.8%、交雑種が「200 頭以上」で 65.0%、乳用種が「200 頭以上」で 60.5%となった。昨年度との平均頭数の比較では、黒毛和種は昨年度：454.1 頭、今年度：569.0 頭。交雑種は昨年度：712.6 頭、今年度：617.5 頭。乳用種は昨年度：722.9 頭、今年度：693.4 頭となった。

(2) 経営土地面積、畜産用地

■肥育牛飼養頭数規模別の 1 経営体当たりの経営土地面積（平均）は、200 頭以上の経営体が 20.6ha、畜産用地は、200 頭以上の経営体が 29.5ha であった。

(3) 経営形態

■畜産専業・兼業の状況は、200 頭以上の経営体では「畜産専業」70.0%、「複合経営」15.7%、「兼業経営」12.9%であった。

■経営形態は、200 頭以上の経営体では、「肥育専業経営」が 45.4%、「繁殖・肥育一貫経営」が 24.2%、「乳肉複合経営」が 3.9%、「育成・肥育経営」が 20.3%等となっている。200 頭以上の経営体の方が肥育専業経営の割合が高くなっている。

(4) 売上高

■農業経営体全体の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 7 億 7,200 万円となっている。昨年度の 200 頭以上の経営体の平均売上高 7 億 3,100 万円と比較すると、やや増加した。

■肉用牛関連の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 6 億 6,300 万円となっている。昨年度の 200 頭以上の経営体の平均売上高 6 億 600 万円と比較すると、かなりの程度増加した。交雑種や乳用種の価格は下落傾向だったが、黒毛和種が高値で安定したことが背景にあると思われる。

(5) 労働力

- 肉用牛関連に従事する家族労働力は、200 頭以上の経営体では平均 2.8 人であった。
- 肉用牛関連の正社員は、200 頭以上の経営体では平均 7.0 人であった。
- 肉用牛関連の非正社員は、200 頭以上の経営体では平均 3.0 人であった。
- 肉用牛関連作業における 1 日当たりの平均労働時間は、200 頭以上の経営体では 7.8 時間であった。
- 従業員の労働時間の長さについての意識は、全体で「とても長い方だ」が 2.3%、「まあ長い方だ」が 16.8%、「どちらともいえない」が 57.7%、「短い方だ」が 23.2%となり、経営体の規模による大きな差異は見られない。

2 生産費（肥育牛 1 頭あたり）

- 品種別に見ると、200 頭以上の経営体では、黒毛和種 1,133,339 円（昨年度 1,072,392 円）、交雑種 769,714 円（昨年度 740,816 円）、乳用種 560,248 円（昨年度 467,673 円）であり、もと畜費等の高騰の影響を受けて、生産費は上昇した。

<生産費（肥育牛 1 頭あたり）> 200 頭以上の経営体

	もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	牧草・放牧・採草費 (円)	敷料費 (円)	光熱水道力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	建物費 (円)	自動車費、農機具費 (円)	生産管理費 (円)	労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費 (円)
黒毛和種	655,599	256,353	27,305	13,894	18,038	5,747	18,052	10,602	12,533	30,600	13,081	9,431	51,787	13,916	6,046	9,645	1,133,339
交雑種	349,637	265,223	23,599	14,173	10,052	3,204	10,553	9,837	7,182	19,072	9,150	5,916	35,482	8,282	7,170	8,818	769,714
乳用種	223,780	200,851	15,832	18,276	7,269	2,808	9,486	4,861	13,978	12,983	16,266	5,320	21,099	6,227	6,290	5,080	560,248

※生産費は、費用合計から副産物価格を控除した上で、支払利子及び支払地代を加えたものを指す。

3 もと畜の導入状況

- もと畜の年間外部導入頭数は、「黒毛和種」が 274 頭（昨年度 315 頭）、「交雑種（初生牛）」が 451 頭（昨年度 489 頭）、「交雑種（子牛）」が 496 頭（昨年度 619 頭）、「乳用種（初生牛）」が 917 頭（昨年度 723 頭）、「乳用種（子牛）」が 640 頭（昨年度 922 頭）となっている。
- 1 頭当たりの導入価格は、「黒毛和種」が 651,856 円（昨年度 582,972 円）、「交雑種（初生牛）」が 239,250 円（昨年度 211,566 円）、「交雑種（子牛）」が 339,054 円（昨年度 304,670 円）、「乳用種（初生牛）」が 110,061 円（昨年度 59,528 円）、「乳用種（子牛）」が 205,417 円（昨年度 154,544 円）である。近年のもと畜価格の高騰の影響を受けたものと思われる。

■もと畜を外部から導入する際に重視する点は、黒毛和種は、「価格」「血統」「健康状態」「体型の良し悪し」「発育状態」が上位となっている。交雑種（初生牛）は、「健康状態」「血統」「価格」「発育状態」「体型の良し悪し」が上位となっている。交雑種（子牛）は、「健康状態」「価格」「血統」「発育状態」「体型の良し悪し」が上位となっている。乳用種（初生牛）は、「健康状態」「価格」「発育状態」「体型の良し悪し」「体重（重い）」が上位となっている。乳用種（子牛）は、「健康状態」「発育状態」「価格」「体型の良し悪し」が上位となっている。

4 肥育牛の出荷状況

■黒毛和種の年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体で平均 534 頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で 2,415 円/kg、相対取引で 2,455 円/kg となっており、市場出荷と相対取引の価格差はほぼ見られない。

■交雑種の年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体で平均 577 頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で 1,446 円/kg、相対取引で 1,483 円/kg となっている。黒毛和種と同様に、交雑種でも市場出荷と相対取引では、大きな価格差は生じていない。

■乳用種の年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体で平均 908 頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で 993 円/kg、相対取引で 975 円/kg となっている。

■年間の副産物（きゅう肥）の状況は、200 頭以上の経営体で、平均年間販売数量が 1,614 トン、金額が 620 万円となっている。

■市場出荷の実施は、200 頭以上の経営体で平均 4.3 割、相対取引の実施は、平均 5.7 割となっている。大規模な経営体は、安定供給が行いやすいためか、相対取引が多いようである。相対取引の相手先は「法人」が 8 割であり、地域も「県内」が多い。

5 繁殖雌牛の種付状況

■黒毛和種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は 74.6%となっている。

■交雑種の主な種付方法は「受精卵移植」であり、受胎率は 71.1%となっている。

■乳用種の主な種付方法は「人工授精」「受精卵移植」であり、受胎率はそれぞれ 52.7%、24.2%となっている。

6 飼料の給与状況

- 給与している飼料は、200 頭以上の経営体では「稲わら」、「成畜用配合飼料」、「とうもろこし」、「ふすま」、「大麦」、「いね科・イタリアンライグラス」等が上位となっている。
- 肥育牛の給与状況（1 日あたりの 1 頭への給与量）を見ると、肥育前期では 7.7kg、肥育中期では 10.0kg、仕上げ期では 9.8kg となっている。

7 敷料の使用状況

- 敷料については、「おが粉」が圧倒的に多く、200 頭以上の経営体の使用率は 87.2%となっている。

8 取り組んでいる経営努力

- 200 頭以上の経営体が現在行っている経営努力は、「低価格な飼料調達に努めている（64.6%）」「従業員の安全を確保（52.6%）」「機械化を積極的に進めている（49.5%）」「もと畜を低コストで導入する（38.5%）」「自社ブランドを確立し、出荷金額を高めている（36.5%）」「低価格の敷料調達に努めている（32.8%）」等が多い。一方で、昨年度と比較すると、昨今の人材不足や働き方を見直す動きの影響からか、「従業員の安全を確保」が 40.0%から 52.6%と伸びている。
- 今後 3 年間の経営展開について、200 頭以上の経営体では「増頭」が 37.4%、「現状維持」が 55.4%であり、「減少」「生産しない」が 7.2%となっている。
- 200 頭以上の経営体が増頭する理由は、「売上高を増加させるため」が 60.0%と最も多く、次いで、「出荷先があるため」が 45.7%となっている。
- 規模拡大への課題について、200 頭以上の経営体では、「子牛の導入価格・販売価格の動向（59.7%）」「資金繰り（52.8%）」「肥育牛の販売価格の動向（51.4%）」「施設・機械の更新・拡大（50.0%）」「後継者・人材確保、育成（41.7%）」等の課題がある。
- 一方、経営規模を「現状維持」「減少する」理由は、「もと牛価格の高騰」が圧倒的に多く、60%以上を占めている。もと畜の高騰は、経営を逼迫させる程の影響を与えているようである。